

図表1 新学習指導要領（平成20年改訂版）

小学校		保健	
第5・第6学年	目標	(3)	心の健康、けがの防止及び病気の予防について理解できるようにし、健康で安全な生活を営む資質や能力を育てる。
		(3)	病気の予防について理解できるようにする。
	内容	工	喫煙、飲酒、薬物乱用などの行為は、健康を損なう原因となること。
		オ	地域では、保健にかかわる様々な活動が行われていること。
(7)	内容の「G保健」の(3)の工の薬物については、有機溶剤の心身への影響を中心に扱うものとする。また、覚せい剤等についても触れるものとする。		
中学校		保健	
第3学年	目標		個人生活における健康・安全に関する理解を通して、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力を育てる。
		ウ	健康な生活と疾病の予防 健康な生活と疾病の予防について理解を深めることができるようにする。
			喫煙、飲酒、薬物乱用などの行為は、心身に様々な影響を与え、健康を損なう原因となること。また、これらの行為には、個人の心理状態や人間関係、社会環境が影響することから、それぞれの要因に適切に対処する必要があること。
高等学校		現代社会と健康	
第1学年	内容の取り扱い	イ	健康の保持増進と疾病の予防 喫煙と飲酒は、生活習慣病の要因になること。また、薬物乱用は、心身の健康や社会に深刻な影響を与えることから行ってはならないこと。それらの対策には、個人や社会環境への対策が必要であること。
		(2)	内容の(1)のイの喫煙と飲酒、薬物乱用については、疾病との関連、社会への影響などについて総合的に取り扱い、薬物については、麻薬、覚せい剤、大麻等を扱うものとする。

※平成20年度で改訂された箇所を色文字で示している。

# 学校のアルコール健康教育における課題と展望

神戸大学名誉教授  
石川 哲也

毎年4月は「未成年者飲酒防止強調月間」です。わが国では学習指導要領に基づき、小学校、中学校、高等学校において、「喫煙、飲酒、薬物乱用防止」に関する教育が行われています。いま、学校のアルコール健康教育における課題は何なのでしょう。そして、どのような健康教育の手法が研究され、注目されているのでしょうか。健康政策学が専門の石川哲也先生に伺いました。

編集部

## ●学校におけるアルコール健康教育の意義

アルコールは、健康への影響が大きく、生活習慣病のリスク要因のひとつです。保健学習の目標である「生涯を通じて健康で安全な生活を送る」を達成するためには、小学校のうちからアルコール健康教育を行う必要があります。習慣は若いころに形成されやすく、年をとるにつれて強固になるものです。早期に悪い習慣がついてしまうと、大人になってもやめられません。

1991年からアメリカの青少年を調査しているCDC（米国疾病管理予防センター）は、青少年の危険行動を6つ規定しています。「不慮の傷害や暴力に関係する行動」「喫煙」「飲酒および薬物乱用」「望まない妊娠およびHIVを含む性感染症などに関係する性行動」「不健康な食行動」「運動不足」です。

これら6つの危険行動は、それ自体が健康に大きな影響を与えるだけでなく、それぞれが密接に関係しており、ひとつの危険行動がほかの危険行動を招きます。例えば、青少年の飲酒は喫煙や危険な性行動を招き

やすいことがわかっています。そのため、これらの問題に対しては個別に対処するのではなく、包括的に対応していかなければなりません。

## ●日本で行われている健康教育

学校における健康教育は、学校の教育活動全体を通して行い、生涯を通して健康で安全な生活を送ることができるようにとの趣旨で行われています。また、すべての小学校、中学校、高等学校において、子供の喫煙、飲酒、薬物乱用を防ぐために、発達段階に応じた指導を保健の授業で行うことが義務付けられています。これは、文部科学省が教育課程の基準を示す学習指導要領によって定められており、指導する内容も定められています。

ただし、子供にアルコール問題がある学校では、こうした画一的な健康教育では不十分です。それを補うために、健康課題に応じた指導として特別活動も行われており、個別の問題にも対応しています。

特別活動においては、学級活動の「日常生活や学習環境への適応及健康教育における社会的な側面が強調されています。

## ●日本の健康教育成果と課題

学習指導要領にアルコール健康教育が定められたのは、平成元年です。その効果かどうかは検証が必要ですが、近年、青少年の飲酒は減ってきています（図表2）。アルコール健

等学校です。

小学校においては、「喫煙、飲酒、薬物乱用などの行為は、健康を損なう原因となること」との文言は同じですが、新たな項目として、独立しました。また、「地域では、保健にかかわる様々な活動が行われていること」という項目が新たに明示されました。これにより、地域の保健活動に関連付けた指導も可能になりました。

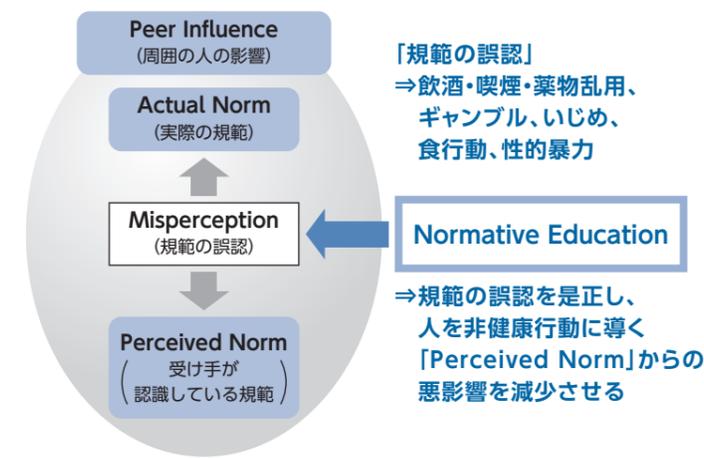
## ●平成20年に改訂された学習指導要領

学習指導要領が平成20年に改訂されました（図表1）。健康教育の点で大きく変わったのが、小学校と高

び健康安全」の領域です。また、個別の指導など、学校の教育活動全体を通じて指導を行う必要があります。

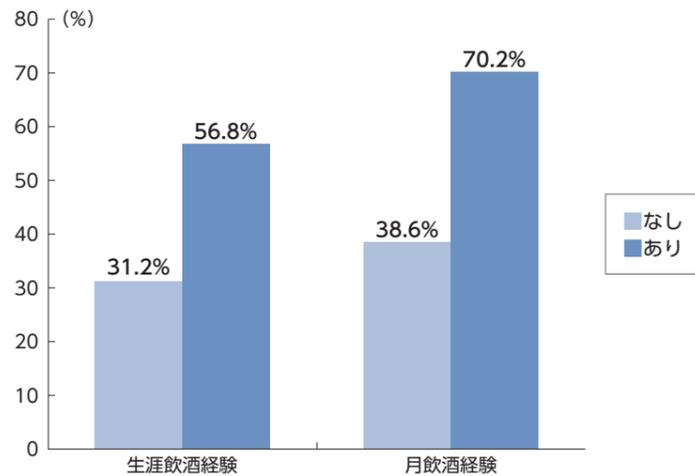


図表5 ノーマティブ・エデュケーションの理論



出典：Berkowitz(2004)「The Social Norms Approach: Theory, Research」より作成

図表6 飲酒率過大評価の有無と飲酒行動の関連 (石川、藤宮ら)



出典：藤宮正規「薬物乱用防止教育に関する研究」神戸大学修士論文、2010.2

■いしかわ・てつや

薬学博士、神戸大学発達科学部名誉教授、1947年兵庫県生まれ、岐阜薬科大学大学院修了、岐阜薬科大学助手(環境衛生学教室)、岐阜女子短期大学助教授を経て、1984年文部省体育局長、1984年文部省体育局長、1992年文部省体育局長、1995年文部省体育局長(併)教科調査官、1995年文部省体育局長、1998年神戸大学教授、2010年現職。

次は、教育現場へのノーマティブ・エデュケーションの浸透に期待したいと思います。それには、まだまだ研究が足りません。新しい教育手法は、確かなデータで効果を実証して初めて広まっています。私自身は、1985年から、喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育に携わってきました。未成年者のこのような行動が減少してきているという現状を嬉しく思いますが、まだまだ頑張らなければと思っています。

な個人の行動変容です。それに加えて、青少年がお酒を容易に買えないようにするなど、環境もしっかりと整備しなければなりません。よく言われていることですが、教育と環境整備の両面からアプローチし続けていく必要があります。

教育に関して言えば、効果が出てきているということに自信を持っていいと思います。その上で、研究者と学校の先生が連携して、学校の教育を進めていく必要があります。そうすれば、青少年の飲酒をさらに減らしていくことができるのではないのでしょうか。

研究者と学校の先生との連携という点でいえば、現状はあまり良いとはいえません。この連携は、大きく2つに分けられます。

1つ目は、われわれ研究者が行う研修会に参加していただくことです。ライフスキル教育やノーマティブ・エデュケーションなど、新しい効果的な健康教育の手法のノウハウや技術を身につけていただき、現場で実践していただくことです。

しかし、学校の先生はこうした研修を容易に受けることができません。受けなければならぬ研修が多

●誤った認識を正す

ノーマティブ・エデュケーション

自己価値感と自己有能感から成っています。自分は大切にされている、自分はやればできるという意識を持つていけば、青少年は自分にとって真に良くない行動はしないということになります。いわゆる「自分を大切にする気持ち」のことです。

ライフスキル教育は、すでに教育現場で始まっているのですが、まだまだ広まっていません。その理由は2つあります。

1つ目は、難しいということです。ライフスキル教育の理論を理解し、目の前の子供に実践していくのは簡単ではありません。

2つ目は、ライフスキル教育をしつかりと行うためには、対応の時間がかかるということです。「生きる力を育てる」という包括的な教育ですから、例えば、アルコール健康教育だけにライフスキル教育を導入することは難しいのです。ライフスキル教育を行うのであれば、普段から腰を据えてじっくりと、時間をかけて行わなければなりません。

このように、ライフスキル教育は効果が大きい一方で、負担の大きい教育とも言えることもできるのです。

過ぎて、とても忙しいのです。その一方で、学校の許可が下りずに、希望する研修に参加できないこともあるようです。

2つ目は、研究者が行う調査への協力です。われわれ研究者は、現場の状況がわからないと研究もできません。ノーマティブ・エデュケーションが日本でも効果的であるということを実証するためにも、先生の協力

ているので、日本にもノーマティブ・エデュケーションを導入すれば、教育の役に立つ可能性が高いのです。

ノーマティブ・エデュケーションの有効性については、久里浜医療センターの樋口院長も外国のデータを引用して言及されている通り、アルコール問題の防止教育において、有効性があるといわれたのが「ハイリクス」学生に対する簡易介入」と「大学生生に対する規範教育(石川注ノーマティブ・エデュケーション)」だけでした。

ただし、ノーマティブ・エデュケーションは、実際にはまだ日本の教育現場で行われていません。私たちが着目し始めたのも4年ほど前のことで、日本では研究実績がなく、これから研究を重ねていかなければなりません。そのためにも、まずは研究者の間でノーマティブ・エデュケーションについて知ってもらい、意識を高めていく必要があります。

●求められる

研究者と先生の連携

青少年の飲酒を防ぐために最も大切なのは、これまで述べてきたよう

もちろん、光明もあります。ライフスキル教育が重要だという認識が、かなり広まってきたのです。セルフエスティームという言葉も、私は平成2年から言っていました。そのころは少数の研究者しか知りませんでした。それでも今は、皆がその意味を知っています。

やはり、青少年の問題構造を見たときに、ライフスキル教育やセルフ

が必要です。

昔は学校の先生が個人的に引き受けてくれたのですが、最近では承認が下りず、引き受けてもらえないことも多くなってきました。学校の組織がしっかりしてきたことの証左でもあるのですが、残念なことです。

●広まりつつある新たな

健康教育の手法